第24回JPHMAコングレス

由井寅子名誉会長の基調講演

4つの症例改善を語る

ワクチン・薬害のケース等

日本ホメオパシー医学協会の由井名誉会長は2日間にわたり基調講演をおこなった。由井名誉会長は自ら自然農を静岡伊豆半島と北海道洞爺で展開し、農産物の付加価値をあげるため加工品、化粧品などにも力を注いでいる。世田谷の用賀にはオーガニックレストランを経営している。

由井名誉会長

由井名誉会長は、2つのケースを発表した。「医原病のフタがあるとなかなか治癒に導くことができませんが、医原病のフタをどうやって外し、治癒に導いていくかに注目していただきたいと思います」と前置きし発表した。ケース①40代女性主訴：子宮頸がん子供の頃よりインフルエンザワクチンを毎年接種、30代子宮頸がんワクチン2回接種。不正出血、子宮頸がんステージIB3と診断。その後子宮頸がんⅣ（4）期（末期）になってしまいました。由井名誉会長がTBRを用いて選んだレメディー、そして麻酔の害出しとして、麻酔を希釈振盪したレメディーを選択した所、好転反応もなく、難なく取れたとのこと。その後の検査結果では、今回、腫瘍マーカーが基準値に入り細胞診でも癌の活性化は見られない、という結果でした。

2回目の相談会で選択したレメディーは子宮頸がんワクチンを希釈振盪したレメディー。するとクライアントからの報告で、好転反応による症状が辛いので子宮頸がんワクチンを希釈振盪したレメディーはとるのをいったん止めたそうです。

子宮頸がんワクチンを希釈振盪したレメディー30Cで反応が如実に出ていたことから、やはりこの子宮頸がんワクチンが悪さをしていたのかと分かった、と由井名誉会長。ホメオパシーは同種療法です。その後、このクライアントはインナーチャイルド（以下インチャ）癒しと祝詞心経に取り組む中で子宮頸がんワクチンのレメディーを再開。そうすると、以前のような副作用は全く無く、クライアントからも「もう子宮頸がんのワクチンは体から無くなったと感じる」という報告が。その後、子宮頸がんの経過は良好で、全く癌の形跡が残っておらず、影も無いと医師からも驚かれたようです。由井名誉会長からは子宮頸がんワクチンとインフルエンザワクチンの霊的見解が解説されました。ケース② 40代女性主訴：酷いアレルギーステロイドによって病気になったケース。この方もワクチン・薬害の害のケースであり、そして幼少期に壮絶な事件があり、また母から愛されなかった深いインチャのケースでもあります。このケースでも原因となったと思われるステロイドを希釈振盪したレメディーをとることで好転反応が強く出てしまいました。由井名誉会長からはステロイドの霊的見解を解説。このクライアントのインチャとリンクする関係が見られました。その後の相談会で「サポート魂の目覚め」が出されましたが、この方はこのサポートをとり、インチャ癒しに取り組み、魂の目的である霊性の道を行く中で、霊性が目覚ましく上がって行ったという素晴らしいシェアがなされました。

「私達はこの世に生きながら、前世や過去世の影響を受け、親や先祖の意識の影響を受けている。魂の傷を癒すレメディーや、過去世や先祖の意識を癒すレメディーを探し求め、日本中の神社仏閣、霊山を駆け巡って、Japan Spiritレメディーを作りました。Japan Spiritレメディーのおかげ様で多くの治りにくく難しい患者さん達まで治癒に導けるようになったのです」の報告。ケース①50代女性主訴：子宮腺筋症による大量出血この方は子宮腺筋症で毎月月経が来るたびに大量の鮮血が出て貧血になる。またその多量の鮮血を見るたびに恐怖になりパニックになる。由井名誉会長による第1回目の相談会。そしてZENホメオパシーのアプローチ後、クライアントからの報告では、子宮からの大量出血は、出血が長引かなくなった。そしてインナーチャイルド癒しをし、小学生の頃に、父に胸を触られたことがあるのを思い出し、高校生の時、父に抱きつかれたことも思い出したそうです。由井名誉会長はこのケースは過去世の経験が影響を与えていると見立て、クライアントが父から性的被害を受けた事、毎月大出血が起こり恐怖になる事、娘を過剰に心配する事、女である事への非力に感じる事などが過去世との関係があると。レパトリーでは過去世の感情も入れてレメディーを選択。随時はサポート過去世を選択しました。クライアントからのインタビューではサポート過去世を飲んだら首への症状が現れ、またこの症状に関連する過去世の記憶が出て来たという報告があり、気づきと熱、そして涙が凄く出た後、エネルギーと霊格が上がり、調子がとても良くなったそうです。由井名誉会長への感謝が述べられました。ケース②30代男性主訴：引きこもり生まれてずっと実家から出られない緘黙緘黙とは、何らかの心理的要因によって、一時期にあらゆる場面においてのみ、言葉を発しない状態を指します。雨になると無償に不安になり、眠れない傾向もあります。この方がなぜ緘黙になり、雨が降ると不安になるのはなぜか？このケースも今の主訴にクライアントの過去世が深く関わる非常に興味深い内容でした。クライアントは前世で地域を見守る業務に当たっており、そこで起こったあるショッキングな事件が今世の現在の状態に繋がっているようです。またこの方の霊的見解として、激しい後悔と悲しみがある反面、神のような力があるというプライド意識が強いということでした。由井名誉会長の相談会でそのような見解がクライアントに告げられました。その後、選択されたレメディーをとる中で、象徴的な夢を見、そして本人の報告とパートナーからの報告とで認識のずれがありながらも、大きく変化・改善があったようです。

突然変異

自然と人工は別

河田昌東氏、来賓講演

河田昌東氏

【来賓講演】「遺伝子を破壊・操作する技術の何が問題か」河田昌東（分子生物学者）

河田氏は、メンデルの法則の発見から現代のゲノム編集技術までの歴史を語った。

1865年の遺伝という現象の発見に始まり、DNAの発見、突然変異と進化の関係、放射線による突然変異、DNA二重らせん構造、遺伝子組換え研究と安全対策会議、除草剤耐性作物の商品化、ゲノム編集技術と進み、2012年にはより効率の良いゲノム編集技術としてCRISPR－Cas9が登場しました。放射線照射して突然変異を起こす技術は古くから存在します。ガンマ線（電磁波）照射によるものが長く行われていましたが、最近は重イオンビーム（原子の粒子）の強力なエネルギーでDNAを壊す技術も開発されました。自然界でも突然変異は起こっているのだから、自然突然変異と人工突然変異は変わらないと言われることもありますが、自然突然変異と人工突然変異は、厳密に科学的なレベルで言えば異なるのだそうです。自然界では、自然放射線や紫外線などにより細胞のDNAは一日約2万か所が壊れています。このほとんどがDNA一本鎖切断であり、DNA修復酵素でほぼ正確に修復されます。この際にまれに起こる修復ミスが自然突然変異ですが、変わり方は、塩基が一つ異なるものに置き換わる場合がほとんどです。従来の品種改良はこのような現象を利用してきました。

今、重イオンビーム照射とゲノム編集が話題になっていますが、どちらもDNAの二本鎖切断を起こしやすく、DNA修復ミスによる問題（大規模な遺伝子の欠損や他の位置への挿入）が多くあります。しかし、変異が起きやすいことが、経済性が良い、産業化に向いていると捉えられてしまっています。

また、ゲノム編集特有の問題点として、オフターゲット（標的外遺伝子の破壊）、大規模なDNAの破壊、進化に対する逆行（自然突然変異はDNAの機能していない部分に蓄積されるが、ゲノム編集では機能している遺伝子を破壊する）もあるそうです。そして、遺伝子操作技術は単なる技術的な問題だけではないようです。生命操作の倫理的問題も教えていただきました。すでに、豚の臓器を人に移植すること、皮膚細胞などから卵細胞を作ること、デザイナーベビー、筋肉増強など、技術的にはできるようになっているそうです。

しかし、これらの生命倫理に関わることにどのように対処すべきかの議論はほとんど行われていないとのことです。また、遺伝子組換え生物やゲノム編集生物などが環境に出てしまった場合に、繁殖したらどうなるか、生態系にどのような影響があるのかなどはほとんど未解明とのことです。

フードテックに懸念

さらに、フードテック（昆虫食、培養肉、スギ花粉症対策米など）も生命操作を産業の手段にしており、将来の自然生態系への影響に懸念があります。放射線問題の専門家でもある河田先生は、トリチウム汚染水放出の生物学的な影響についても説明した。タンパク質やDNAには水素原子がたくさん含まれていますが、これらの水素原子がトリチウムに置き換わったものをOBT（organic bound tritium有機結合トリチウム）と呼びます。OBTがどうやってできるかというと、例えば、光合成では、二酸化炭素と水と光エネルギーからブドウ糖を作りますが、この時にトリチウム水を取り込んでしまうと、トリチウムの入ったブドウ糖が出来ます。

ショ糖などが加水分解する時にもトリチウム水が取り込まれれば、トリチウムの入ったブドウ糖や果糖が出来ます。タンパク質の加水分解でも同様に、トリチウムの入ったアミノ酸が出来ます。細胞は糖やアミノ酸からDNAやRNAを作るので、トリチウム入りのDNAやRNAが出来ます。トリチウムからの放射線被ばくももちろんありますが、トリチウムは崩壊すると、結合を作らないヘリウムに変わってしまうため、その箇所の結合が切れてしまうという問題が起きます。

これがOBT特有の問題です。OBTは食物連鎖により濃縮されるため、今は問題が無くても長期的には大きな問題になる可能性があります。

最後に、生命現象についてはまだ不明のことが多いということで、素敵な研究を教えていただきました。「トマトが乾燥や雨などの情報を超音波でやり取りしている」「蜜蜂の羽音を聞いて花が蜜を増やしたり、花と蜜蜂が音でやり取りをしている」。このような我々がまだまだ知らなかった自然界がこれから明らかになっていくでしょう。自然生態系の中で我々人間自身もひとつの生物に過ぎないんだということをしっかりと頭に入れてこれから社会を作っていく必要があると締めくくっていただきました。

講演に引き続き、由井寅子名誉会長との質疑も行われた。安全性審査や表示制度の不足、規制自体の決め方の問題など社会的な側面についての議論が多く交わされた。北海道の遺伝子組み換え作物規制では、住民をランダムに委員に選出し1年間をかけて規制案が作られ、議員が仕上げて条例化されたという民主的な良い事例を教えていただきました。研究は禁止しないが、栽培には知事の承認が必要で違反したら罰金というところに落ち着いたようです。その結果、北海道では遺伝子組み換え作物の栽培は行われていないとのことです。

一方で、トリチウム水は分離技術の提案があるにもかかわらず海洋放出が決められました。六ケ所村というより大きな問題があるために強引に進めたのではないか、というのが河田先生の見方でした。国レベルを動かすことは大変ですが、上記の北海道の例や種子条例のように、地方からできることもあると希望を持つことが出来ました。